

周遊型展覧会＋パフォーマンス「ひとひのうた」 展覧会制作ノート:まだ見ぬ空間の未来・イメージについて

1.未明——あちらとこちらのあわい

参加アーティスト:斎藤茂吉、管啓次郎、春原直人、山本桂輔

会場:東北芸術工科大学 THE WALL

1-1.はじめに

山形ビエンナーレ2024を蔵王温泉で実施する構想をはじめた2023(令和5)年9月当初から、東北芸術工科大学と蔵王温泉の2エリアを周遊する芸術祭にしたいという思いがありました。芸術祭というと、決まったルートがあるというよりも、いくつかのエリアで、さまざまなアーティストの展示やプログラムが実施されていて、そこを自由にめぐるとするのが一般的ではないでしょうか。ただ、山形ビエンナーレ2024は、芸術監督である稲葉俊郎先生の『ことばのくすり』(大和書房、2023年)のコンセプト——「ことば」を「くすり」と捉える——と、その構成——「未明」「朝」「昼」「夜」という時間の流れ——が非常に重要でした。そのため、あえて、ルートを設定し、本学から蔵王温泉へと周遊する構成としました。

もちろん、自由にめぐっていただいて鑑賞に不都合があるというものではありません。ですが、10数キロの距離がある本学と蔵王温泉を芸術祭として繋げること、そのルート・構成を通して作品を鑑賞することが、次第に作品同士の重なりを生み、全体としてひとつながりの鑑賞体験を生じさせるのではないかと。そのような思いから、このテキストは、「未明」「朝」「昼」「夜」の全6会場、さらに蔵王温泉22ヶ所にわたる「蔵王うたのみち」の展示構想について、まだ見ぬ空間の未来を想像しながら、ひとつのタイムラインとして書かれています。

1-2.「未明」のこと

ここ、「未明——あちらとこちらのあわい」は、周遊型展覧会＋パフォーマンス「ひとひのうた」だけではなく、「山形ビエンナーレ2024 いのちをうたう」全体にとっての「入口」——はじまりの場所です。しかし、この「入口」は、判然としない「未明」という時間をキーワードとしています。一般的に、「未明」とは、「夜」と「朝」の間を指します。けれども、本展ではそれだけを意味しません。

そう、ここは、「市街地」(山形市街地)と「山地」(蔵王)の「間」です。2022(令和4)年、開学から30周年を迎えた本学は、まさしく、街と山の間につくられました。1990年前後は田んぼと畑が広がっていたと聞きます。登れば山——蔵王があり、下れば街がある。そういった環境で、アートとデザインの私立大学として設立して30年余りが経ちます。私(たち)がいまいる土地——距離に対して、まず目を向けたいと思いました。

もう一つは、「イメージ」(絵画、彫刻等)と「言葉」(短歌、詩等)の「間」です。アートディレクター・杉の下意匠室によるメインビジュアルの男性の正体は、歌人・医師として活躍した山形県生まれの斎藤茂吉(1882-1953)。「言葉」が、山形ビエンナーレ2024では重要な意味を担っています。蔵王温泉に斎藤茂吉の歌碑が建立されていること、そして、稲葉先生から、「言葉を空間に配置しながら、来場する方々の固定観念をほぐしていくことができるのではないか」というアドバイスがあったことが推進力になりました。また、準備を進める中、詩人・管啓次郎さんから、「人間の思考とは、言葉とイメージの複合体である」という言葉もいただきました。「言葉とイメージの複合体」。私(たち)の思考がそこから形作られているということを少し意識していただきながら、芸術祭をご覧いただきたいと思っています。

1-3.アーティストとその作品について

壁面の中心には、画家・春原直人さんの絵画作品が展示されます。彼は、「蔵王」をモチーフとする作品を、《巖Ⅱ》(2016年)、《Connect》(2023年)と描いていますが、学生時代の《巖Ⅱ》は、春原さんにとって転機であったといえます。すなわち、遠くから見つめるのではなく、自ら山に登り、分け入っていき、その体感を含め描くこと。今回展示される新作は、蔵王をテーマにして欲しいということ、そして「未明」のセクションの展示であることを伝えた上で制作されました。曰く、春原さんが何度も、何度も登っている蔵王連峰、そのいくつもの側面が一枚の絵画の中に表現されていることでしょう。

春原さんの絵画の周囲には、斎藤茂吉の短歌21首(「歌人 斎藤茂吉 蔵王文学のみち」より)が、デザイナー・平野篤史さんのデザインとアイデアによって展示されています。こうして自らの絵画とともに茂吉の短歌を展示することを提案してくれたのは、春原さんでした。そこには、絵画を制作するにあたって、歌が描写している世界も借りたという思いが当初あったからだだと記憶しています。それが最終的に絵画にどう反映されたか・されなかったかは別にして、空間としては、「蔵王」のイメージと言葉が重ねられることになりました。

その壁面手前には、美術家・山本桂輔さんによる丸太を素材とする彫刻が並んでいます。山本さんは、今回の作品プランで、こういうことを書いてくださっていました。「睡眠によって、夢を見る事によって、私は何かを思い出そうとしている。／丸太から作られるこれらは、そういったものを誘発する道具である。丸太は丸太のままでありながら、異質なイメージを同時にまとう」。さらに、「木や山は夢を見ない、と思う。でも、それを想像してしまうのが人間でもある」とも。「夜」と「朝」の「未明」の時間とは、人にとって、植物にとって、動物にとって、はたまた山にとって、どういう時間であるのでしょうか？

管さんの16行詩「われわれは歩いた」は、2024年2月半ば、管さんの提案で、本学から蔵王温泉まで、ビエンナーレに関わる10数名で10数キロ歩いた出来事がモチーフになっています。ただ、詩には、蔵王での出来事にかぎらない、「歩くこと」に対する管さんの思考があらわれているようです。「今日はあなたも一緒に歩きましょう。話はしても、しなくても。歩いて出会うものをただ受けとめ、草をむすぶようにして覚えていこう。これも新しいはじまり、新しい発見」(管啓次郎「歩くことはいつも」『ことばをながめる、ことばを歩く—詩と歌のある風景』リトルモア、2018年)と、管さんは言います。歩くこと。「未明」の場所から、別の場所へ——その一步を、ここから踏み出していただきたいと思っています。

2024年8月19日

総合キュレーター: 小金沢智(東北芸術工科大学専任講師)